

タカクラ・テル

「ハコネ用水」について

福田 丈晴

小説「ハコネ用水」は、一九四八年一月から七月まで雑誌「大衆クラブ」に連載され、いったん中断されたのち、単行本として一九五一年三月に刊行された。

作者のタカクラ・テル（本名高倉輝豊）については、今日、それほど知られていない存在ではないが、一九一九年雑誌「改造」に戯曲「砂丘」を発表して以後、現在なお時に創作を発表している、息の長い作家の一人である。一九一七年京都大学を卒業したのも同大学嘱託となったタカクラは、一九二一年ロシア語とロシア文学の熱心な精進のため退学するように嘱託をやめ、作家として出発することを決心したが、「作品や著書を依頼してきていた雑誌社や出版社が、そのとき、いっせいに、執筆をこ」とわり、出版を破約にして「くるという、かれの文学的立場を左右する事件がおこり、かれは極貧の生活をよぎなくされた（「人生問題から社会問題のナヤマヘ」『前衛』一九七〇年二月号）。これは、当時の文壇の中心の作家たち——その中心は、タカクラと同様に京都大学を卒業し、文壇の「大御所」とよばれた菊池寛である——

が、タカクラの作品を取り上げるなら自分たちは書かないと、雑誌社や出版社に、圧力をかけたためであった。しかし、タカクラは、このなかで、「文学ぼんらいのあり方、読者大衆との結びつき、そのあいだにはさまる文壇だんというものの本質について、いやでも、しんげんに考えざるおえなくなった」（「わたしのあゝあるいてきた道」『人民文学』一九五一年五月号）。こうしてかれは、戯曲三部作『女人賛歌』（一九二二）をはじめ数多くのヒューマニズムの立場に立つ作品を、直接単行本にして発表していったのである。またタカクラは、一九二一年に長野県上田地方の農村青年たちが土田杏村の協力を得ておこした上田自由大学の学習運動にかかわり、そのなかで長野県の農村に移り住み、しだいに農民運動にかかわっていった社会運動家であり、戦後は日本共産党の衆議院議員・参議院議員として活動した政治家でもある。この「ハコネ用水」そのものが、一九五〇年のマッカーサー指令によって日本共産党中央委員と参議院議員を退放されたために、執筆に専念できるようになり、ようやく完成をみた作品なのであった。

タカクラは、一九四三年に「ハコネ用水の語」を雑誌『中央公論』に連載した。「ニッポン農業史の一部として、水利の歴史おしらべているうちに」ぶつかったコハネ用水についての研究をまとめたものである。ハコネ用水の掘り抜きを「世界的なトンネル」「ニッポン人がなしとげた最大の工事の一つ」とみたタカクラは、この

ハコネ用水を完成させた友野与右衛門の非業な死と合わせて「いいよーのなない感激にうたれ」、「すぐ、創作の材料にしよーと決心した」（『ハコネ用水の語』一九五〇年）。それは、かれが農民運動のために一九三三年に検挙され、「心にもなく」「当局おあざむくつもり」で転向した（「わたしのあゝあるいてきた道」）のちのことであつたと思われる。

ハコネ用水のつくられたのは、江戸時代四代將軍徳川家綱の寛文年間（一六七〇年完成）で、全長一二八〇・三メートルのこの用水は、箱根芦ノ湖の水を、湖の西側の湖尻峠のふもとから掘り抜いたトンネルを通して静岡県側に落とし、深良村など駿東地方の数千町歩の田畑を灌漑したものであった。この工事に費した金額は七三三五兩二分一朱といわれるが、当時の人夫一人の日当八八文に割当てると延べ人員八三万三三八六人を要したことになり、当時としてはいかに大きな事業であつたかが知られる。掘り抜きは箱根側と静岡県側とから同時に進められていったが、ほとんど食い違いなく両方のトンネルが合致している。当時の技術水準がいかに高かったかがわかる。友野家に伝わった高等数学をともなり高い水利技術は、直接外国から影響を受けたものではなく、甲州流算法とかかわりつつ発達したものであった。タカクラは、これほど高い水利技術を持っていたことは、「当時のニッポン農業が、十分、ヨーロッパの農業と肩おならべ進める基そお持っていたことお意味する」とのべ、さらにつぎのようにのべている。「（したがって）、科学

や数学のてんでも、ニッポン人わ、りっぱにヨーロッパと並んで進める方向お示していた。ただ、じつにざんねんなことに、当時のニッポンの支配階級わ、長くその支配おつづけるために、いっさいのてんで、それ以上の発展おふせぎとめた」（『ハコネ用水の語』）。

江戸浅草の町人友野与右衛門は、このハコネ用水を独力で完成させた。しかも、友野は幕府にとらえられ、石牢・磔の刑に処せられたという。商人としても、また科学者としても、たしかにそれは、タカクラの創作意欲をそそるに充分な人物であり、またその事業は全体として追究するに価する興味ぶかい歴史的素材であつたにちがいない。

タカクラは、この小説の意図について、初版本（理論社刊）「まえがき」のなかで、こう書いている。

「ハコネ用水」わ、「オーハラ・ユーガク」（大原幽学）につぐ、わたしの長編だ。わたしわ、このために、全力おあげた。もともと、「オーハラ・ユーガク」で、あたらしい文学の形式お作りだそーと、努力した。これまで、文学、とくに、「純文学」といわれるものの本流になつていかに見える、個人的な心理描写おできるだけ、しりぞけ、事件のモンタージュで、歴史の本質に迫ろーと、ころろみた。これわ、「映画的手法」と呼ぶのがふさわしいと考える。とにかく、全動労者のための、ほんとのリアリズムとわ、こーいうものでなくてわならないと、わたしわ信じている。この作品で、それお、いっそー、てっていさせよーと努力

した。

このなかで、わたしわ、「さこく」のものとトクガワ封建制の、こんぼんのなれじれお取りあつたつもありだ。それによって、今のニッポンの社会の底お流れるものおえぐりだそうと苦心した。そのためわ、こゝいう手法お取らないわけに行かなかった。

ここで主張されている「映画的手法」については後述するが、そのまえに一言しておきたいのは、タカクラの独自の表記法についてである。すでに引用した文章のなかにもみられるように、かれの表記法は、慣用の表記法とはかなり違ったものになっている。それは、タカクラが、一つには用語を平易化し、漢字をできるだけ使わないことが文学大衆化の不可欠の要件であり、いま一つはそれぞれの民族語がその語法において不合理な点をきりすて、しだいに合法則化し、整備がすすむにつれて単純化していくのが通則であり、したがって「発音式カナズカイ」もことばの進化の当然の成り行きとしてとらえていたことによる。タカクラは、すでに一九三六年の雑誌『思想』八・九月号に「ニッポン国民文学の確立」を発表し、文学の大衆化を主張しているが、そのなかで、小林多喜二が「不在地主」を書いたときに、「荒木又右衛門」や「鳴門秘帖」のようにひろく読まれるようにと書きそえたにもかかわらず、農民のあいだで読まれなかったことを例に、つぎのようにのべている。大部分のプロレタリア文学の作品は「カナがふつてない」。「これわそれらの読者を、極めてわずかのインテリ・プチブル層

にかぎり、それいがいのいっばん大衆が読者となることお、ことさらに、こぼんでいるものだ」。また「たんにカナおふつただけでわ、それらが、けつして、げんざいの生産者大衆に理解できるものでない」。「カナおふつても、大衆に理解できないよーな『土族的』なことが、や文字お平気で使いながら、文学の大衆化お叫ぶことが、いかにこつけないことであり、また、そんな大衆化の運動が、いかにまやかしのものであるかということお、もはやすべての文化人が、はっきり、知らなければならぬ」(『新文学入門』増補新版、一九五三年より引用)。

タカクラは、このことを、長野県の農村に住んだなかで知り、「インテリの用語でわなく、大衆のことばで、作品お書かなければならぬ」こと、「大衆が生産点で使つてることばこそが、もっとも高いニッポン語でありそのことばで書こーとする努力が、作品の質まで変えるものであること」に、このとき、はじめて気がついたという。そうしてこの立場から書いた最初の作品が「大原幽学」であり、ついでこの「ハコネ用水」であつた(「わたしのあるいてきた道」)。

小説「ハコネ用水」は、湖尻峠の西側、つまり静岡県側に位置する「ニッポン一のびんぼー村」——深良村の名主大場源之丞の家に泊つて用水の計画を相談していた友野と右衛門が、その後、盗賊の団に襲われるところから物語をはじめている。盗賊団にいきなり持ち金五〇両を与えてその場をおさめる友野の豪気な性格を示しつ

つ、首領蒲生玄蕃との問答のなかで掘り抜きの概要を語らせる展開は、大衆性を要するこの作品にとって、ひとつの物語への導入となっている。

主人公友野と右衛門は、基本的にはハコネ用水の掘り抜きが、新田開発の見返り米を受け取ることによって十分に採算のとれる事業となるものとみなして事業に着手しようとする。スケールの大きな商人のタイプとして描かれている。しかし、掘り抜き事業の進展とともにこの事業は、たんなる金儲けでは続行しえない様相を呈してくる。幕府が、このような大事業が庶民の手で成功することを、結局は幕府の權威を失墜させるものとして喜ばなかったからである。したがって、作品に描写されているように、工事はつねに沼津代官所の隠密な監視の下におかれ、また抗木に傷をつけて事故をひき起こさせるなどの具体的な妨害工作さへ行なわれたのである。友野が石牢で死を遂げる結末も、時の権力が根本的には民衆の利益と対立し、友野が民衆の英雄となることを断固拒否したものであることを示している。しかし、掘り抜き事業が民衆の力に依拠しなければ完成できないこと、また一身を捨てても守らなければならぬ仕事であることを自覚するようになってゆく友野の人間像は、控え目な描き方にもかかわらず読者につよい印象を与えている。

友野の家族については、ほとんど不明であるが、作品では妻リツと息子与一が登場する。リツは夫に対して敵身的で優しく、家業をみるいとまのない与右衛門に代わって商売を取りしきり、最後には不足する資金を捻出す

るために浅草の土地も家も残らず売り払って箱根の飯場に米や味噌をもたらす。また与一は、父を尊敬し、掘り抜き事業に協力する、一途な情熱を傾ける若者として描かれている。

この与一や盗賊の首領蒲生玄蕃に深い影響を与える大友右京は、大友宗麟の三男として育てられるが、本当の父親はキリシタン大名宗麟の建てたセミナリオを訪れてしばらく城中に滞在したイスパニア人だと仮構されている。長くヨーロッパを旅行し、天文学や医学など多くの学問を身につけ、現在にはキリシタンを棄教していると設定された大友老人の存在は、この作品のなかで大きな位置をしめているが、そこには、鎖国の枠をこえた学問や思想のあり方を示そうとする作者の用意があつたと思われる。タカクラは、大友老人に「これらの学問(注、ヨーロッパの進んだ学問——引用者)わ、やがて、ニッポンへも、はいつてきましょー。(中略)ニッポンも、一日も早く、ヨーロッパのよーな、進んだ国にならなければなりません。トクガワばくふわ、そーいう新しい学問がはいってくることを、何より、恐れて、ひつして、防ぎとめています。これが、今のニッポンの、もっとも大きな不幸です」と語らせている。同時に、タカクラは、大友老人を棄教者として設定することによって、合理主義とあくまで人間のことは人間に解決させようとするヒューマンなモラルの到達点を示そうとしたと思われる(「田村栄」タカクラ・テル『ハコネ用水』、『歴史文学』第四号、一九七四年)。

この作品は、心理描写をなるべくしりぞけ、事件展開によって社会と人物の諸關係の全体像を浮きぼりにしようとする「映画的手法」に特徴がある。タカラは、この「映画的手法」について、つぎのようにのべている。すなわち、「作品にわ、個人の生活おえがかなければならないから、むしろ、心理おたどる必要もある」が、多くの大衆は「個人個人のとくべつな必理よりも、歴史の大きな動きに、ふかい興味もち、関心もち」ている。したがって、「作者が、本質的なもの、歴史的なもの」を描くならば、大衆は「じぶんのまわりにおきている事実のほんとのいきお知り」「ふかい感動お受ける。(中略)これわ、モンタージュによらないでわ、ぜったいにできることでない」と(「映画的手法」「文学」一九五一年一〇月号)。

この作品の「映画的手法」は、全体として成功しているといえる。そうして最高の権力者から貧しい農民に至るまで社会の諸階層をそれぞれの人物像としてできるだけ描き込むことによって万華鏡的味わいを意図したこの作品は、ともすれば個人の必境の追究に集中する傾向のつよかった近代日本文学の私小説的伝統に対する批判を意味するものであった。たとえば、沼津代官野村彦太夫について、下級武士から苦勞しつつ代官に出世するまでの一人の役人の生き方を、人民にきびしく上役に忠実な俗吏の典型として描き、そこに骨がらみの派閥抗争や、出世した途端に自墜落となる人間変質の問題などをおりこむなど、行きとどいた描出を試みている。また幕府老

中の酒井雅楽頭についても、私生活にわたって権力者の生活の非人間性が追及されているが、一方そうした権力者のもつ人間的苦悩をも重ねて描いて見せている。

しかし、この作品の心理描写の排斥もしくは輕視の傾向は、近代文学の本質にかかわる問題として検討の余地がある。たとえば、心理描写をばく手法の結果として、大友老人の人間の・思想的影響によって山賊の磐をはなれ掘り抜き工事の有用な働き手となる盜賊蒲生の内部変革については、やや講談調の大味な説得力に終わっており、人生目標の転換を描き込むためにはさらに諸側面からの追及が必要であろう。また、表現の平易を目ざすあまり、形容詞の使い方などが平俗に流れたり、事柄も描写も誇張が過ぎてリアリティを欠く箇所もいくつかみられる(たとえば、箱根権現の別当快長僧上の若き頃の恋愛について描いた箇所など)。このことは、タカラの「国民文学論」が、国語の合法則化||単純化という理論に根ざしており、それと不可欠に結びついて表現の問題があるわけで、今後の課題として、一語一語について描かれている状況に即して厳密に検討すべき問題をふくんでいる。

最後に、「ハコネ用水」が刊行された一九五一年には、文壇に「国民文学論争」が起こっている。しかしこの作品は直接その論争とのかかわりで書かれたものではなく、戦前から作者の内部に固まりつつあった「国民文学論」の実践であったことを付け加えておく。(了)

付言―この小稿は、箱根合宿旅行で報告する予定であったものをまとめたものである。